
FUCK'N BRAT

蛇豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FUCK・N B R A T

【Nコード】

N 9 8 4 9 Y

【作者名】

蛇豆

【あらすじ】

とあるヤクザの若頭、土田寛平が頭を撃ち抜かれた。意識を失い、目覚めた所は地獄の底辺、「辺獄」。どうやらここで十人の人間を殺さないと現世へ戻れないらしい。だが、その前に立ちはだかるのは……英国の名殺人鬼切り裂きジャック、人食いスウィーニー・トッド、米国史上最悪の殺人鬼アルバート・フィッシュエtc……。歴史に残る世界の殺人鬼達が次々と襲いかかる！！敵も味方も主人公もみんなチートです。

異世界転生極悪バイオレンスファンタジーここに開幕！！

いーあどーじやあああああ！？ 1

「らああああああ！！」

前田組若頭、土田寛平は日本刀を振るった。
すると、前にいた男の頭が吹っ飛んだ。

深夜の大阪市で前田組と相田組との抗争が勃発していた。
前田組若頭、土田寛平が部下四十人を率いて、相田組三十人を討
つ。

だが、前田組は劣勢にあった。
相田組の連中が手榴弾を装備していたのだ。

土田のすぐ横で爆発音が鳴り響いた。
振り向くと、組の者がまた一人犠牲になっていた。
下半身を丸ごと吹き飛ばされ、血溜まりの中で無意味に両手をじ
たばたさせていた。

既に半数以上が殺されている。

土田は叫んだ。

手榴弾が迫る。腕で跳ね除けると、すぐ先の空中で爆破した。
粉塵の中でまた斬る。
最寄りの男の胴を唐竹割りした。

だがその直後、発砲音が。

ここはどこじゃあああああ!？ 2

すぐ右横にいた男が拳銃を構えていた。

銃口から射出された弾丸が土田の頭を貫いた。

「はぐあ……!」

土田の視界が瞬間、赤に染まった後、黒に埋め尽くされた。
崩れ落ちる刹那、

兄貴!! 兄貴!!

と声がしたが、口を開く事ができなかった。

土田は意識を失った。

それからいくらか時間が経っただろうか。

目が醒めた。

起き上がると、辺りに広がる余りの光景に愕然とした。

見知らぬ樹海のご真ん中で、土田は目覚めたのだ。

思わず、頭を抱えた。

なんでや、

なんでワイはこんな所におんねん?!

突然、焦燥に駆られた。

「いーあどーじやあああああ！？」 3

「なんじゃあ、ここはあああああああ！！！」

土田は叫んだ。腰に提げた日本刀が揺れた。

何処から誰からも返事はない。

「ー糞、ここあ何処じゃあ？」

記憶を探っても、何も手掛かりは無かった。どうして此処にいるのかも、此処が何処なのかも全くわからない。

混乱したが、暫くすると整理がついた。

「……進もか……」

かったるく呟いて、土田は歩きだした。

土田は取りあえず、この樹海を抜ける事にした。

一歩踏み出す毎に粘り気のある土が靴に張り付く。

少し進むと、もしかしたら、俺は他の組の奴等に埋められかけたのではないか、と思いついたがすぐに撤回した。

理由のない、根拠のない全く机上の空論だった。

いーあーどこじゃあああああ！？ 4

歩いて三時間。

一向に樹海の終わりは見当たらない。むしろ深部に来ているのではないだろうか。さらに、この上無く腹が減った。

「あー牛丼でも喰いたいのお…」

土田は前田組の若頭であり、刀捌きも良いが、典型的なメタボ体型である。

何か特別なこともなく、ただ単純に大飯喰らいだという事に由来する。

「……飯になるもん無いやろか…？」
辺りを見回してみる。

飛び回るのは、バッタや蛙、蠅くらいのものしかない。

仕方無いのでバッタを捕まえてみた。

体長二十センチ程の赤い体躯。土田の手の中でがむしゃらに抵抗する。

……いただけない。
放り捨てた。

懷石料理などで舌が肥えてしまった土田があんなもの生で食べられるわけがなかった。

腹が減ったのを我慢して、前に進む。

「いーあーどーじやあああああー!?」 5

すると、突如女の叫び声が。

甲高い声で、助けて、とはっきりと聞こえた。

「何や!?!」土田は慌ててその方向へ向かった。

金髪の二十歳程の女が悲鳴を上げながら走っていた。

その後ろには、黒いローブを着た、壮年の男。

この男に女は追いかけていた。

これを三十メートル離れたところで目視で確認した土田。

「エライシャバイ事やつとんのお……」苔に覆われた岩の陰で刀の柄に手を掛ける。「……アホは殺さなな」

岩陰から岩陰へと次ぎ、移動する。土田は見えてくれとは裏腹に、とても俊敏だ。草むらを這う豹のように、静かに素早く獲物に近づく。

そして、男との距離が五メートルにまで詰まった時、土田は飛び上がった。

「何さらしとんじゃ!?!ワレエエエエ!?!」

一瞬で相手の懐に潜り、刀を振った。

男は成す術なく、首を切り落とされた。

泣き別れした胴から勢い良く吹き出す血飛沫が大木の幹に降り懸かる。

男の体が崩れ落ちた。

ここはどこじゃあああああ!？ 6

次の瞬間、泣き喚いていた女が突如として懷からピストルを取り出し、銃口をこちらに向けてきた。

「こっちに来るなあああ、クソ死達^{バルバ}ア!!」

打ち震えながら、嗚咽を漏らしながら、叫ぶ。相当に息が荒い。眼の瞳孔が完全に開いていた。明らかに殺意のある眼だった。罵倒が続く。

だが、次第に声は弱々しくなっていく、瞳から大粒の涙を漏らし始めた。

「逃がしてよ……お願い……ここで死ぬなんて私……」とうとう、女はひざまずいてしまった。

ーなんじゃあ、コレ？

土田には状況が全く読めなかった。

助けた少女がいきなり銃口を向け、泣き始めたのだ。

さあ、これはどう取ったらしい？

土田には思いつかなかった。

取り敢えず、慰めてやることにした。

しゃがみ、女の頭を撫でる。

「：ワシやあヌシン命なんぞ取りやあせんよ。安心せいや」
そうしてやると、女は徐々に落ち着きを取り戻していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849y/>

FUCK'N BRAT

2011年12月7日00時49分発行